

小林 彌 六 著

現代資本主義分析
(上)

御茶の水書房
刊

著者略歴

小 林 彌 六

1933年 長野県に生まる

1956年 東京大学経済学部卒業

1961年 東京大学大学院社会科学研究科博士課程修了

1969年 立正大学経済学部教授

1972年 経済学博士（東京大学）

1974年 筑波大学社会科学系助教授

現 在 筑波大学社会科学系教授

主 著 鈴木鴻一郎編『経済学原理論』上・下（共著，東京大学出版会）

『経済学批判体系の生成』（1967，御茶の水書房）

『流通形態論の研究』（1972，青木書店）

大島清編『現代経済入門』（1975，共著，東京大学出版会）

『価値論と転形論争』（1977，御茶の水書房）

『経済原論』（1978，御茶の水書房）

現住所 〒177 東京都練馬区東大泉町 102 番地

現代資本主義分析（上）

1979年 5 月25日 第1版 第1刷発行

定価 2000円

© 著 者 小 林 彌 六

発行者 百瀬 けさも

発行所 株式会社 御茶の水書房

〒101 東京都千代田区神田神保町2-36

振替東京 8-14774 Tel (265) 5746

3033-41081-0736

印刷・加藤文明社／製本・常川製本

は し が き

現代の世界において資本主義は爛熟の極に達している。その占める領域は社会主義圏を除く世界の大半に及び、アメリカ・西独・イギリス・日本・フランス等の先進諸国には、めくるめくように巨大な富が集積され、世界の各地でさまざまな物産が生みだされ、それがさまざまな経路をたどってふたたび世界の隅々にまでいき渡っている。日本に住むわれわれがヨーロッパはたまたアフリカの地の産品を手にするということは、もはや日常茶飯の出来事である。資本主義世界は、かつて人類が経験したいかなる時代よりも巨大な全体に膨脹した。その年々生み出す財貨は多様・膨大な量に達し、それらがさまざまな方法で消費される。資本のかたちであるいは建築物・さまざまな種類の耐久消費財・家具・美術品・貨幣・有価証券等として蓄積された富は巨額であり、また開発された科学技術・技能も夥しい。生産力の水準はめざましく向上し、オートメーション化された無人のような工場の中で鉄鋼が生産され、自動車が猛烈なスピードで量産されては、工場から排き出されていく。原子力発電は随所でおこなわれ、ロケットは宇宙飛行の旅に向かっていく。

資本主義世界は巨大な生産力を陶冶し、自家薬籠中のものとし、旺盛な活動力を誇っている。その中に二十数億という人々の哀歎に満ちた日々の生活が織りなされている。資本主義は魔法の力で巨大な生産力を生みだし、その結果もたらされる富は、無数といってよい程の人々の生活を潤していることも事実である。

とはいえ、このような巨大な全体に達した資本主義世界は、その地域により多彩な様相を呈している。一方では夥しい人口と富の集中した地域があるかと思えば、他方ではあたりに人影を見ない過疎の地域がある。豊かな先進資本

主義国にたいして、多数の人々が飢えに苦しむ貧しい発展途上国も数多くある。都市と農村との懸隔はいぜんとして存在する。また工業と農業との開き、重化学工業と小企業を主体とする軽工業の性格のちがい、人々の階層・職種・人種のちがいによる所得の隔差など、さまざまな点において複雑極まりない様相を呈している。またそれらのさまざまな事実がたがいに関連しあい連繫しあつて、複雑な全体を形づくっている。資本主義世界は一体どのような仕組みをもっているのか、またそれはどのような運動法則をもつて動いているのかは、なかなか見極めがつきにくくなっているのも当然の結果である。

工業を農業から分離し、市場経済の仕組みによつて経済を巨大な全体として編成した資本主義は、もともとその内部に非常に多くの要因を包含しており、他に例を見ない複雑な社会構成体である。それでも紡績機械と蒸気機関によつて支えられた十九世紀の青年期の資本主義は、ランカシャーの多数の工場の煙突から吹きだされる噴煙が空にたなびく多分に牧歌的な情景において、ある種の簡明性をそなえていたように見える。A・スミスやK・マルクスのような経済学の巨匠の筆は、このような確立の資本主義の情景を一種幾何学的な美しさで画いてみせてくれた。

これにくらべると、現在われわれが直面している資本主義の様相は、非常な変貌を遂げている。資本主義の軸点はさまざまな地域に分化し、世界経済は多くの極の連合体として構成されるようになっていく。怪物じみたコンビナートから吹きだされる炎や煤煙が大気を汚染し、そこから排出される液体が海水を不気味に侵していく。資本主義の開発した生産力は地球の規模を狭隘に感じさせる程になっており、公害問題や核戦争の危険に見るように、人類にとってなかなか手に負えない程に成長している、それとともに、資本主義はかつてとは比較にならぬ大きな規模のものになり、その内包する因子の数は二乗・三乗され、その有する側面はますます多様化しており、複雑極まりなくなっている。現代の資本主義の相貌を一つのキャンパスの中に画きだすという作業は以前にくらべて至難ともいふべく困難を

極めるものになっているといっても、あながち過言ではないであろう。

現代の資本主義の複雑性についてはまた別の角度からも考えることができる。元来資本主義は封建社会の母胎の中から成長してきた商品経済が、一段と発展したことによって成立した社会形態である。商品経済が社会の仕組みや生産関係から独立した、いわばそれらに対して「外的」な交易関係として、生まれ発展したということによって、資本主義は商品経済に固有の原理によって一つの社会を組み立てる力をもっていた。そのために資本主義はさまざまな社会的な関係・権力による強制・法律・慣行・宗教的な戒律等から離れて独自の経済制度として確立し、自律的に運動することが可能であった。その点でこれまでの社会形態とははなはだしく異なっており、そのことが人々を少なからず驚かせた。この当惑感が近世以降の経済学を生みだす原動力になったことは、その歴史をたどってみると、ただちに納得できる。しかし、このような資本主義の難解性は、裏返していえば、資本主義の合理性、明解性につながっている。それは極小の経費によって最大の効果をあげることをめざす商品経済的な原理を中心にして織りあげられている。それは経済制度であり、また社会形態である。それはまた、社会が存在するのに充たさなければならない条件を充足するものでもなければならぬ。したがってそれは多分に単純で簡明な構成原理にもとづいており、また恣意的・偶然的な要因の入り込む余地が比較的に少ない社会形態であるといつてよい。これにくらべると、他の社会形態は、種々の錯綜しまた偶然的な要因によって規定される、曖昧模糊たる不定形な社会であるにすぎないともいえる。

しかしながら、資本主義が本来もっていた合理性・客観性は、その後、資本主義が高度の発展段階に達するとともにしだいに色褪せてきたように見える。とくに現代においてはこの傾向がいちじるしい。資本主義はもはや商品経済の原理によって首尾一貫する自足的な制度としてはとどまりえなくなっている。それとともに国家の威圧的な相貌が前面にせり出し、その多彩な政策の及ぼす作用をはなれては、現代の資本主義の運動を語れなくなっている。国家だ

けではなく、資本家団体・労働組合・農民団体、はたまたさまざまな職業団体・地域団体・市民グループなど種々の団体がしだいに大きな役割を演じるようになってきている。資本家団体はあるばあいには資本グループを結成して市場の支配や価格の吊り上げをおこない、その資本力を駆使して大がかりなプロジェクトの実行をこころみる。国外への資本輸出を、ばあいによっては政府の援助をひきだしながら、実行する。資本家団体はあるいは、特定の景気政策あるいは労働政策などの実施を政府に要請することもある。また自らにとって好ましい政策を実施できるような政權の樹立のために、陰に陽に策動することがある。労働組合が賃金・その他の労働条件の改善のために活動したり、種々の政策実現のために政治運動をおこなうことがある。その他さまざまな団体が経済活動のあり方にたいして、大きなインパクトを与えている。それだけ経済活動は、種々の利害・原理・信条・情熱等によって直接・間接の影響を蒙るようになってきている。資本主義は、もはや昔日のように単一の商品経済的な原理にもとづいて構成されるものではなくなっている。現代の資本主義は多くの神々をもつ、かつてないほどに複雑で多元的な複合体と化しているといえよう。それだけに現代の資本主義とは一体何であるのか、それはどのような構造をもつか、あるいはその運動法則は何か等、現代に生きるわれわれが避けて通ることができない問題の解決が、非常に難しくなっている。かつての古典的な経済学が与えてくれる理論だけでは、明らかに手にあまる課題にわれわれは直面している。

七〇年代にはいつて資本主義は、また新たな局面に入ったように見える。戦後体制を支えてきたIMF体制は、一九七一年八月のいわゆるドル・ショックによって決定的に崩壊し、その後若干の曲折をへて国際通貨制度は現在の変動相場制に移行せざるをえなかった。金にリンクされたドルを基軸通貨にして国際経済関係の基盤にしてきたIMF体制にかわって、たんなる紙片に過ぎないドルやマルク・ポンド・円などにかろうじて依存するという、資本主義としてはまったく変則的な状況に資本主義は陥込んでしまった。最高の商品経済である資本主義は本来、ある商品を貨幣

にし、「価値尺度」にすることをうじてしか維持されない経済制度である。たんなる紙片を国内通貨としてはもとより、国際通貨として利用するはかなくなったということは、この経済制度が大きな試練に直面していることを表わしている。それはけっして、人類の「英知」の所産ではない。このことも一つの原因になっているとみられるが、永く戦後の資本主義を苦しめてきたインフレーションが各国においてはなほだしい亢進を示し、ときに二ケタの割合での物価騰貴を引き起こすようになった。それだけではない。好況の局面だけでなく、不況の局面においても、高率のインフレーションがつづくという異常な事態を人々は体験することになった。このスタグフレーションあるいはスランブレーションは現代資本主義の病患を露呈するともいえるもので、かつて現代資本主義に有効な政策原理と見なされた「ケインズ理論」の破産は、いまや誰の目にも明らかな公然の事実となった。

いまや資本主義世界は繰り返し襲ってくるインフレーションと不況の嵐に、全身をふるわせ不安におののいている。ときおり訪れる小康状態もまた、この不安から人々が解放されたことを示すものではない。それはむしろ暴風雨の襲来の前にわずかに垣間見られる小さな晴れ間のようなものでしかない。このような不測の事態にたいして、資本主義世界はどのような方策をこうじることができであろうか。すでに触れたように、伝統的な経済理論は破綻をきたし、そこから生じる混乱はその輪をしいに各界に広げつつある。近代理論においても伝統的な理論の限界が序々に確認され、新たな方向を模索する作業が進んでいる。スラッファ革命の気運といい、今また世界に滔々たる「マルクス・ルネッサンス」の風潮も、このような現代資本主義の困難と深く関わるといつてよいであろう。経済学はここにまた世界的な転換点にさしかかっているといえる。とはいえ、その兆候はまだほのかに感じとられるだけで瀬踏みが続く返されるにとどまり、実り豊かな収穫は人々の手にもたらされるにいたっていないように見える。その点では資本主義の動向と似かよったところがあり、視野はなお乳白色の霧に塞がされている。

インフレーションの進行・スタグフレーションの彷徨は国家の政策的な「介入」をもってしても資本主義が円滑な再生産運動をおこなうことが難しくなっていること、市場経済を支える統一的な基準・尺度が失なわれたことを示している。そのために、さまざまな企業・資本の運動はもろろのこと個人にとっても、日々の経済活動・生活の信頼に足る基準がなかなか見出せないようになっていく。人々の立っている地盤はかすかに鳴動し、不安はますますこじわる。人々の社会生活におしとどめがたい亀裂が生じ、資本主義経済の運動はますます偶然性を強め、その形状は不規則に崩れていく。「不確定性の時代」(ガルブレス)が喧伝されるものも、まったくの架構とはいいがたい面がある。

現代の資本主義の性格を考えることができない契機として、巨大な社会主義圏の存在がある。その戦後のいちじろしい発展は生産力の膨脹・軍事力の強化・国際政治における発言力の増大をとめない、資本主義圏にたいするさまざまな角度からの働きかけを可能にしている。そのため社会主義体制の側から資本主義世界にあたえられるインパクトは、戦前とは比較にならぬ程大きくなっている。当然に資本主義諸国はこれに「対抗」し、社会主義圏の圧力から自らの圏域を防衛することに努めなければならない。かくて、アメリカを中心にする世界的な防衛体制が網の目のように張りめぐらされ、核弾頭をつけたミサイルが常時空をにらんでいる。資本主義諸国の軍事体制は整備され、社会主義体制との対抗によって国際政治の動向が大きな影響を受け、当然にまた各国の動向も左右されるようになる。経済の軍事化が進み、「産軍複合体」の動勢がアメリカ資本主義の命運を律する程の大きな存在に成長している。同じようなことは他の多くの先進資本主義国についてもかなりの程度あてはまるし、それからまた相互に密接に関連しあっている。中ソ対立という奇妙な事態をかかえ込んだ社会主義体制の動向と資本主義世界の動向とは深く関わり連動する関係にある。このことが現代の資本主義のあり方を強く規定し、そのことがまた現代資本主義の性格を複雑にし、運動法則を特殊なものにしていることは否定できない。

これまで述べてきたことからその一端がうかがわれるように、現代資本主義は非常に複雑でかつ多面的な構造をもった複合体であり、その仕組みや運動様式もかつての資本主義のそれとは、いちじるしく異なる。まえにも述べたように、十九世紀の自由主義段階の資本主義とはもちろんのこと、十九世紀末からの古典的帝国主義の段階とも、はなはだしい性格のちがいがあつた。ちなみに社会主義圏との「対抗」という事実や、国際通貨制度でもかつての金本位制度にかわつて、IMF体制あるいは変動相場制にみられるような管理通貨制度が採用されていることを想起すれば、このことは容易に納得できるであらう。ヒルファーディングやレーニンが情熱をこめて語つた重工業と金融資本・帝国主義の時代の資本主義も、今日の資本主義にくらべるならミニチュア的に規模も格段に小さく、かつ単純な構造をもつものにすぎなかつた。この一見してなかなか捉えがたい現代の資本主義とは一体どのようなものであるか、いかなる理由にもとづいてそれが成立したか、それはいかなる構造をもち、いかなる運動をもつかを科学としての経済学は説明する努力を怠ることはゆるされぬ。

もちろんこれまでもさまざまな人々によつて、いろいろな角度からその検討がなされてきたことは事実である。それによつて現代資本主義のさまざまな特徴が浮彫りにされてき、それなりに上述のような問題にたいする解決の糸口が探りだされてきているということはできる。しかし、ともすれば福祉国家・管理通貨・大衆社会・恐慌の消失・産軍複合体など、種々の特徴が注目されるにとどまるだけであつたり、さまざまな限られた視角からの現代資本主義観が至当の理論として開陳され、主張されるにとどまる傾向が強かつたように見受けられる。これは現代資本主義の多面的な性格と関わりがあるのかもしれない。たしかに現代資本主義は人々が接近するルートによつてじつにさまざまな姿容を現わす巨大な山嶺にも似ている。その正しい全体像を捉えることはなかなか難しい。さればといつて現在でも時々見かけるように、不均等発展・独占の支配等の古典的な帝国主義論の教条だけを尺度にして、現代の資本主

義の豊饒にして多彩な現実を裁断することはゆるされないであろう。それでは到底処理し切れない新たな現実が疑いなくそこには息づいていることを、忘れるわけにはいかないのである。自然科学のばあいとはちがつて、経済学の対象は時間とともに非可逆的に遷り変わり、変化していくものであるだけに、既定の教条だけに縛ることが、しばしば理論と現実との距離をはなだしく大きくしやすいことは心しなければならぬ。自然科学のばあい主たる問題は、対象にたいしてどのような方向から切り込んでいくかという分析の方法の如何であろう。経済学の場合には、経済現象自体が休むことなく変貌をとげるものであり、それを構成する因子も変化するものである。そのことをも考慮して、対象にどのように分析のメスをふるうかが、回避することのできない重要な課題になるのである。

このような点にわれわれが絶えず心していなければ、ヒルファディングがかつて『金融資本論』の序言で触れたようなマルクス主義が「経済理論の継続的形成を怠っている」、という「非難」にも一面の妥当性があることを否定できない状態にいつの間にか陥り、経済科学は既成の教条のたんなる反復・解説をむねとする停滞の淵をさまようことにもなりかねない。近くはまたP・M・スウィーजीが「マルクス主義社会科学の停滞、その遅々とした活動力や成果」について嘆息しているような状態に、いつふたび陥ってしまったいともかぎらない。既成の経済学の批判として定立され、また既成の諸科学の革新の科学として確立されたマルクス経済学がそのような方向に進んではならないことは、ここにあらためて説くまでもなく自明の事実であろう。このような点からすれば、経済学原理論での一般理論や段階論の一層の精密化・陶冶が図られねばならないことはもちろんであるが、さらに資本主義の現状を科学的に究明する努力が鋭意推進されねばならない。現代の資本主義がさまざまな面であつて見られなかった展開を示しているために、それを正しく分析し把握する試みが時代の気運によって強く要請されている。

本書はこのような問題を追求することを目標にしている。それはまず現代資本主義はいかなる根拠にもとづいて成

立したか、それはいかなるものであり、どのような構造をもっているかを、諸家の説の検討をも加えてできるだけ明確にすることに努める。そのさい、国家が現代資本主義においてはたすようになっている大きな役割に照らして、またこれまでの現代資本主義論にとって国家論が手薄であったことをも反省して、国家とは何かを論じるとともに、現代資本主義において国家がはたす役割は何か、それはどのような政策をおこない、いかに機能するかを明らかにする。また金融資本を中心にする資本・労働者・農民等と国家との複合体である現代資本主義の運動様式を明らかにすることに努める。さらに三〇年代の諸国において現代資本主義あるいは「国家独占資本主義」がいかなるかたちで成立したか、またそこにはいかなる類型が見受られるかを検出することに力を注ぐ。三〇年代は現代資本主義の分析の原点にあたると考えられるからである。このようなわれわれの作業は、大内力氏の国家独占資本主義論や宇野弘蔵氏の現代資本主義にかんする啓示を手がかりにして進められることが多かった。もちろんそのほかにも、内外の諸家の研究成果に助けられることも多かった。そのような多くの学問的な所産に支えられ、それらとの対話をもちながら、本書がどの程度、現代資本主義の豊饒な全体をキャンパスの上に画きだすことに成功しているかは、広く賢明なる読者の判断に委ねることにしたい。刊行にあたって、本書が現代資本主義論の一助となり、また本書の提示するさまざまな論点について諸般からの御意見・御叱正がえられれば幸いと願っている。

本書は、これまでに刊行された『経済学批判体系の生成』『流通形態論の研究』『価値論と転形論争』『経済原論』等の著述を中心にする経済理論・経済学説の研究の作業の推進とともに、著者のうちにしだいに醸成された現代の資本主義の分析にたいする志向にもとづいて生みだされた。このことは経験科学としての経済学の研究が理論と現実との関わりをめぐる絶えざる緊張と両者の微妙な平衡関係のうちに展開されねばならないという事情からくる自然の帰結であるかもしれない。また著者の個人的な回想を語ることが許されるならば、著者に経済学への沈潜というコース

をえらばせるきっかけになった事柄の一つに、戦後の混乱期の現状をどう掴むかという問題意識があった。そのような初心の一端がこの著書にはからずとも表明される結果になったといえるかも知れない。

これまでの著作と同様に本書の完成は多くの人々からの恩恵によるところが大きい。惜しくも故人となられたが、宇野弘蔵先生には、経済学方法論・原理論・段階論をはじめ経済学をめぐる諸般について、非常に多くの教えをうけることができた。それが筆者の研究生活のまたとない拠所となった。鈴木鴻一郎先生についても事情は同じで、原理論・段階論の研究をはじめ、学生生活の諸般にわたり、今日にいたるまで教えられることがじつに多かった。そのほか東京大学で教えをうけた諸先生、さらに先輩・友人諸兄からは、研究会その他さまざまな機会に啓発されることが非常に多かったことを逸することはできない。筑波大学関係の方々についても同じようなことがいえる。大島清先生には、さまざまな機会に原理論にならぶ現状分析の重要性を教えられた。そのほかの同僚・友人の方々にも研究会その他おりにふれて自ら多くの示唆を受けることができた。このような多くの人々による絶えざる鞭達・教示と快適な研究条件を整えるうえでの御好意に本書の成立は多くを負っている。

なお最近の『価値論と転形論争』『経済原論』につづく研究生活の作品として、本書の刊行にあたっても、御茶の水書房社長・橋本盛作氏から心あたたまる御配慮と御激励をいただいた。また剣持隆氏には校正その他で大変お世話になった。以上の方々に厚く御礼申しあげたい。

一九七九年五月五日

著 者

現代資本主義分析 (h)

目次

上巻 目次

はしがき

第一篇 現代資本主義の本質

第一章 現代資本主義論の視角

はしがき

- 一 大内力氏の「国家独占資本主義論」……………三
- 二 宇野弘藏氏の現代資本主義論……………四
- 三 国家独占資本主義と恐慌……………五
- 四 国家独占資本主義と社会主義……………六
- 五 国家の機能(一)……………七
- 六 国家の機能(二)……………八
- 七 国家の機能(三)……………九
- 八 国家の機能(四)……………一〇
- 九 フィスカル・ポリシーと経済統制……………一一
- 十 現代資本主義の全体構造……………一二

第二章 国家独占資本主義論のアプローチ

——宇野理論の視角からする現代資本主義論の方法——

はしがき

一三

第三章 現代資本主義の本質——二〇年代と三〇年代——

一 戦争論的アプローチ	六五
二 全般的危機論的アプローチ	六七
三 生産力論的アプローチ	六九
四 恐慌論的アプローチ	七三
五 社会主義論的アプローチ、危機論的アプローチ	七五
六 国家独占資本主義論の視角	七九
一 自律性の減衰	一一
二 大戦後の構造的矛盾	一一
三 戦後資本主義の根本的矛盾	一三
四 大恐慌と資本主義の自律性の減衰	一五
五 危機と恐慌	一七
六 社会主義の展開と資本主義	一五
七 国家独占資本主義の成立	一五
八 危機の様相	一五
九 三〇年代の問題	一六
十 国家とその政策	一五

(下巻目次)

第二篇 資本主義と国家

第一章 原理論と国家

一 原理論と国家

二 経済学の発展と国家論

三 論理的な国家と歴史的な国家

第二章 資本主義の発展諸段階と国家

一 重商主義段階の国家

二 自由主義段階の国家

三 帝国主義段階の国家

第三章 現代資本主義と国家

一 資本主義的国家の本質

二 現代資本主義と国家

第三篇 三〇年代の諸国——国家独占資本主義の諸類型——

第一章 アメリカ・フランス

一 ニューディール期のアメリカ

二 三〇年代のフランス

第二章 ドイツ・日本・イタリア

一 ナチス・ドイツ

二 二〇年代・三〇年代の日本

三 二〇年代・三〇年代のイタリア

第三章 イギリス・スウェーデン

一 三〇年代のイギリス

二 スウェーデンの場合

まとめ

補遺